

「領域」の功罪と のぞましい活動の全貌



坂元彦太郎

△ 1 V

昭和三十年発行の幼稚園教育要領において、はじめて「領域」という考えが打ち出され、そのことがさまざまな問題をひきおこし、多くの功罪をもたらした。新幼稚園教育要領もまた、六領域という形と精神とをそのままていくという、おそらく、以前よりは周到な説明が加えられているが、やはり、従前通りの混乱や、功罪がずっと尾をひくのではないかと思われる。だから、六領域をたてた功罪について反省をして、功を多くし罪を少なくすることが、現在でもなお大切なことと私は信ずるのである。

領域は小学校などの教科とはちがう、ということとは前要領でも書いているが、それを真正面からくわしくは説明していない。幼稚園における幼児ののぞましい活動を分析して、それを適当に分類したものが領域であるわけであるが、これによって幼児の指導を計画的にすることはできるが、感ちがいをする、ばらばらな指導になりかねない。いずれにしても、この「領域」が世にばっこしたために、いくつかの功罪がうまれた。

先ず、功の方をあげて見よう。

(一)研究会や話し合いのとき、共通の意味をもったことばで話し合うことのできる共通の場ができた。

(二)自分が行なった保育を、あとから反省したり、整理したりする

のに便利である。また、これから計画をたてるときにも、どういう面に注意しなければならぬかがわかって便利である。

(三) まずねらいをおきえた上で活動や内容を考えるので、計画性ができる。

ところが、これに対して、罪というべきものを次にあげよう。

(一) 「領域」に対する理解の浅さや、誤解からくる混乱が相当に各方面におこっている。極端なのは、一日の保育時間をそれぞれの領域に何分ずつをあてたらいいか、といったことが大まじめに問題にされている。

(二) 領域というたて前からははずれた、保育における重要な別の問題がおろそかにされだしていることである。たとえば、むかしはいちばん保育の中心的な位置を占めていた積木遊び、つい先ごろまで議論の焦点であった「自由遊び」、こういったことについての研究がかるんじられかけている。現在でもなお、これらの方がむしろ領域以上に、少なくとも、それとならんで保育における中心的な問題であるはずである。

(三) 「領域」の中に、必ずしも代表的な大切なものがとりおとしなくあげてはないために、あるいはとりあげ方にかたよりのあるために、現在の領域に盛られているものだけに頼ると、ふじゅうぶんなことがおこる。各園によくかかげてある目標の一つに、「あかるくすなおなこども」といったようなものがあるが、これらは、領域の

いずれにもない。もしいれるとすれば「社会」の中にあるべきだと思われるが、こうした幼児が個人として具えてほしいものがじゅうぶんにはあげてなかった。また、「健康」ではどちらかといえば、体育とか運動とかより、保健衛生の方が重んじられていた。これは「社会」とか「健康」とか名前のつけ方によって中味がかたよってしまったているのが、かたよった影響をおよぼしている、ともいえる。

(四) 「領域」にこだわって考えるために、こどもの活動をこまぎれにしてしまう危険をはらむことがある。むろん、ただ幼児のしぜんな活動だけにまかしていいわけではないが、いわゆる極端な経験主義への反動もあり、また研究会などのテーマが領域にたよっているようなことが現実の指導にもうつってきて、従前の、幼児保育では全体的具体的な活動の展開を重んじてきた好ましい点をすて去ろうとするような傾きを示す人々がいる。

(五) もろもろの領域に共通しているような部面を横断的につかまえて研究することがおろそかにされる傾向がないでもない。たとえば、いくつかの領域にまたがる生活の基本的な習慣などをどのようにして養ったらいいか、といったようなことについての関心が従前よりは薄くなってきた。

ところで、領域と幼児の具体的な経験との関係はどういうものであるかを、たとえば語ることにしてしよう。領域にかかげてある一つ一

つのねらいは、いわば、幼児の具体的な経験という、一つの料理を分析して抜き出した栄養素のようなものである。脂肪、蛋白質、炭水化物、ビタミンといった栄養素にあたるものであり、たしかに、実際の料理はこれらから組成されている。しかしながら、それと同様に、それが牛肉、ほうれんそう、とうふといった食品から成り立っていることも見逃すことはできない。むしろ、主婦にとっては、これらの食品を適切に調整しておいしい料理をこしらえるのが、直接のねらいであって、そして、それと同時に栄養価のことも考慮して、栄養素のそれぞれがじゅうぶんでありバランスがとれるように留意するのである。決して、栄養素の粉末などを、じかにこね合わせて料理をつくるのではない。いいかえれば、領域をならべ、組み合わせただけでは、教育課程や指導計画ができあがるのではない。いわば、栄養素である領域のことをじゅうぶん考慮した、食品にあたる具体的な活動を配列したものが、料理のこん立であるところの、指導計画になるのである。

このような点をじゅうぶんに理解することによって、「領域」からおこるさまざまな誤解や混乱を解きほごし、かろんじられかけている重要な事項に、つよい関心をもつようになることがのぞまれる。このような観点から、いま、ともすれば論議の中心からはずされがちな、幼児にいとませる具体的な活動について考えてみたいと思う。

△ 2 V

幼児の実際の具体的な活動にはいろいろな種類のものがある。いま述べてきたような理由からもあるであろうが、このごろはあまり重要な問題としては騒がれなくなってきた。しかし、実はもっとその重要さや適切なやり方が研究されていていと私は信ずるので、以下、私の我流の分類によって概観してみたい。

これから私が分類する標準は、幼児が自分に具えているものと高次の文化的な価値との間における関係の仕方であるといつていいであらう。

(一) 第一の部門は、いわば全く幼児的な活動である。自分の中に具わっているものを自分の力で外に現わすような活動である。これをさらに次のように細分することができる。

(1) 幼児が自分のもっているエネルギーを最大限に爆発するかのように、大きくその身体を動かしてあばれまわる、身体の運動である。ひとりごとびまわることもあれば、鬼遊びやゲームの形で展開することもあるが、こうした遊びへの没頭は、成人の生活における遊びとはちがって、その心身の発達をつよく促し、幼児の人間形成のために重要なはたらきをもっているものである。こどもたちのも

っている精力をせいっぱい発散させることによって、これからの旺盛な発達を約束することができるのである。いわば、幼児は自分をからだごとぶっつけることによって、自己発展をなしとげているのである。

(2) 何か外物を使いながら、自己をつよく発現するような活動である。たとえば、砂遊び場や海岸の砂や、積木や木ぎれなどを使って遊ぶようなものである。これらは、普通の、上品な絵画や製作よりも、ずっとこどもに近接していて、むしろ、この方が教育的な意義をよりつよくもっているときえいえるかも知れない。砂場で幼児たちはさまざまなものを構築する。大建築を、豪壮なダムを、普通の工作などでは現わしえない、大きな力づよいものを自由につくっていく。自分の夢を、もっている力を最大限にぶちまけている。積木は、いや、ブロックといった方がいいと思うが、外界にあるさまざまな立体的なもので、幼児が自由に動かして積み上げられるようなもの、たとえば、普通の積木、箱積木から、ダンボールや木の箱、板きれ、さては机や椅子などもこれを利用して、自分の夢や理想を立体的なものに具現するのである。新刊の「児童教育における学習の基礎」には、音楽や絵画などとならぶ一つの重要な教育部門として、ブロック構成をあげている。その本には、如何にブロック遊びによって、多くの教育目標がよく達成されるかを、くわしく描き出している。たしかに、こうした種類の遊びは、造形的な構成と

しての表現力を育てるにやくだつだけでなく、いろいろな工夫や考察を熱心にやることによって、論理的な思考や科学的な態度のめばえをやしなうことに大きな力をもっているし、さらに、しごとに熱心に従事するような態度や、こどもたちの間ののぞましい人間関係、社会性をのばすのに大いに役立つのである。必ずしも、砂と積木とだけでなく、さまざまな材料をさまざまな方法で活用していくことが大切であろう。

(3) ことばを通じての自己を発現するような活動がある。自分の中にあることを、すなおに、人にむかって話すことができ、また人の話にもすなおに耳を傾けることができる、といったような、基礎的なコミュニケーションをくりかえしているうちに、それに習熟するようにさせることが大切である。ことばによる自己表現をさまざまにしている条件があれば、それらをとり除くように努力し、からだや表情や声で話す練習を積みませ、自由に気持が通い合えるような雰囲気をつくってやることのがのぞましい。幼児にとっては、ことばはただ口先だけのことでなく、いわば、心とからだの生きたなまみの一片であり、行動そのものでもある。幼児たちとできるだけのことばをかわし合うことにとめ、自由に、フランクに他とコミュニケーションのできるような力や態度を伸ばすようにしたい。

(4) 動植物を愛護したり、自然に親しんだりするような活動も、ここにいられておこう。幼児が自分のもっている気持ちを、動植物の

飼育栽培をしたり、屋外の自然の中であそんだりしているときに、そのまま現わすことであるから、この部類に一応入れておきたい。

こうした活動の中で、しだいに動物をいたわり愛し、自然に感動するところが育ち、それが、やがては、人々に対する深い情愛や、やさしいゆたかな心情をめざめきすこととなり、また、そうしたものへの興味から科学的な関心がうまれてくる道もつづいている。

(二) 第二の部門は、すぐれた文化的な価値をもつものに幼児が接して、それによって幼児が育っていくような活動である。これにも、次にかかげるような、いくつかの種類をあげることができる。

(1) まず、童話などを先生から聴くような活動があげられる。これと同類のものに、教師が演じてくれる紙芝居、テープサード、ギニョールなどがあり、先生が演ずるのではないが、テレビ・ラジオ・レコードなどによって同じような効果があげられる。このような種類のものには、社会の高度の文化的な価値が幼児に受け取られやすい形で結晶しているものであって、幼児はそれらを吸収することによって自分を高めるのである。しかも幼児たちはつよい興味を感じ、その中の人物などにたやすく同一化して、外面から見れば全く受身のように見えながら、高いすぐれた世界のもの forcefully 摂取しているのである。いわば、精神的な離乳期にある幼児が、こういう形で成人からの栄養分をとりこんで、自分を成長させるのである。したがって、教師が話す技術の巧拙よりも、こうした文化財の内容の質

が問題である。殺人やこわい話のぞましくないのはいうまでもないが、きれいごとばかりでなくてもいい。成人から見ても芸術的にすぐれているものが必ずしもいいわけではなく、素朴ではっきりした屈折があり、あたたかい愛情にみちたようなものが、のぞましいのではなからうか。

(2) ままごと、さまざまなごっこ、などのような「劇化」の活動がここにあげられる。これらは、しぜんのうちに、人間の高度の価値を身につけるはたらきをするものであって、幼児の活動としては大きな教育的意義をもつものである。ごっこの中には、自然発生的に幼児たちが生み出してくるものもあれば、教師がある程度意図的に指導して成立するものもあるが、その心身の発達に大きなやくりをもつことを理解して、幼児がそれらに没頭し、しだいにその活動を発展させていくよう、あたたかい眼で見て、奨励することがのぞましい。

(3) 見学や遠足といわれるようなもの、すなわち、現実には、何かすばらしいものの近くにいて経験しているような活動である。時計屋や消防署を見にいったり、林や草原に遊びにいったり、今までのごっこやお話をきくことが外にある文化財を幼児の側にもちこむことであったのに対して、幼児を現実にある価値体のそばに連れていって、感動させたり、同一化させたりすることである。園では、こうした見学を、単に絵などをかいたりするような材料を見つける

機会にしているむきもあるが、それと同時に、その対象そのもの
のことを幼児なりに理解したり、ふんいきを感じとったりすること
が、大切なめあてであることを忘れてはなるまい。

この最後にあげたことは、ままごとや、ごっこについても同様で
ある。これらをやることが対人関係をなめらかにし、社会的な態度
の育成にやくだつのはもちろんであるが、それと同時に、ままごと
は、こどもたちの楽しみのうちに、家庭生活の理解を身につけるこ
とであり、のりものごっこでは、のりものがどんなものかを遊びの
うちにわかることもめあてのひとつである。

第三の部門は、普通に園でおこなわれているような、絵画製作や
音楽リズムのような活動をいう。これらは、いわゆる領域の名とも
共通であるが、いいかえれば、領域にあげてあることが、ほとんど
そのまま活動になるので、領域にこだわる人でも、そう混乱やあや
まりなしに、これらの活動の意義を把握することができると。そし
て、在来からも、普通におこなわれるような材料を使って、普通の
やり方でよく行なわれてきて、園における幼児の最も重要な活動と
されてきた。私が、これを第三の部門にまとめるのは、これらは、
場合によって、多少の程度の差はあるが、成人のもっている文化に
直接通じるものを含み、そうした文化的な価値へ幼児なりに踏み出
して、幼児の生活を高め深めるのにやくだつものである。前の二つ
の部面にくらべれば、幼児的でないわけではないが、素朴な原始

に近い性格がうすくなってきている。大ざっぱにいつて、絵画や製
作はまだ、第一部門により近いものを、音楽よりも多くもつておる
のであって、実は、この部門に属する活動にもさまざま段階があ
ることを見逃してはならない。それで、私案では、この第三部門
を、(1)造形的なもの、(2)からだの動き、(3)音楽、とわけようと思っ
ているが、ここでは詳述をやめよう。

これら三部門、すべてがたいせつなのであり、これらの活動を総
括して、園の教育の味ができあがるのである。こういう点から
も、小学校などの領域や教材とはちがうこともわかるのではなから
うか。小学校では、ごっこの遊びは、何か知的なものを修得するた
めの方便としているが、園ではそのままが大切なことになる。幼稚
園の場合は、幼児の全生活にわたるさまざまな活動そのものが大切
なのであって、それらが全体として順調に発展していきながら、ひ
とつひとつののぞましいねらいが達成されるように、いわば、巨視
的にまた徹視的にともうまくゆくように心がけることが、教師の
つとめであらう。

(本稿は本年七月、お茶の水女子大学における幼児教育講習
会における講演の一部を整理訂正、加筆したものである)

* * *